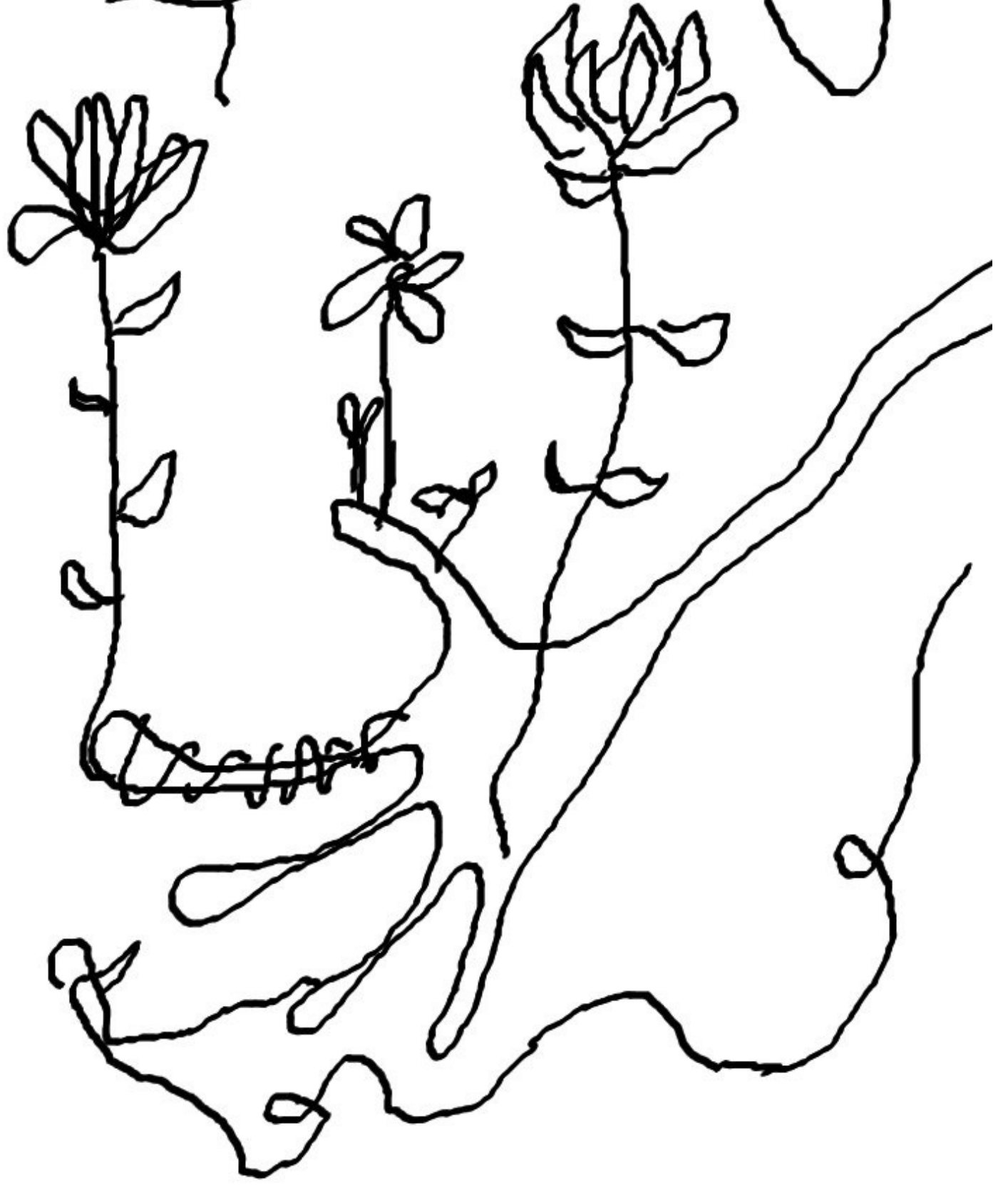


花 生 之 子



別に何があったわけでもなかった。ただ、目が覚めた。枕元にあった時計に目をやると、昼が過ぎようとしていた。どうりで汗を掻いていたわけだ。部屋の中には温まって膨張した空気が俺の体を押しつぶそうとしていた。俺は起き上がり、窓を開けた。銀色の窓枠は陽の光を受けて熱くなっていた。

窓の真下に、家の玄関が見える。路に面していて、草に覆われている。アスファルトと敷地の僅かな隙間から生えているのだ。数ヶ月前は何にも生えていなかったのにいつの間にやら生い茂り、今では俺の胸ほどにまで成長してしまった。名前などひとつも判らぬが、実にバラエティ豊かな草が生えている。こいつのお陰で我が家をご近所の方々に不審な目で眺められているのだろう。こないだ町内会費を回収に来たおばちゃんのあの顔が、俺は忘れられない。しかしだからと言って排除する行為に及ばなかったのは、自然を愛しているわけでもご近所への無意味な抗議行動に出ているわけでもなく、ただ単に面倒だからだった。

太陽の光が眼球を撫で、俺は腹が減っていることに気づいた。朝から当たり前だが何も食べていない。さて何を食べようか、と階下に下るも、冷蔵庫の前で選択肢などないことに思い至った。牛乳と調味料くらいしか入っていない。そう言えば、井上くんが昨夜何か言っていたような気がする。このことについて、だろうか。食う事が出来ぬとわかると、余計に腹が減ってきた。減ってきた、というか、痛くなってきた。そして、腹が減ってくると猛烈に苛ついてきた。なぜ俺はこんなにも腹が減っているのにご飯を食べることが出来ないのだろう、とせめて牛乳をごくごく飲む。冷たい液体が空の胃の底を濡らして、喉を覆ったたんぱく質の膜がより俺を不愉快にさせた。俺は本来、牛乳を愛しているのに。

とにかく、何か食べなくてはいけない。無闇に苛立つのはいけないことだ。

俺は居間の隅に沈んでいる財布を手に取り、玄関に向かった。がらがらと引き戸が鳴って、俺は太陽の光に晒された。相変わらず何一つ遠慮のない光だった。同じくらい無遠慮に繁殖した雑草どもがサンダルからはみ出た俺の足の甲を触った。足首も撫でた。かさかさとした、足に絡みつくようだったし、わけのわからぬ綿のような種のようなものが衣服に付着した。だから俺は思い切り、蹴飛ばした。足が千切れて飛んでしまうのではないか、というくらい思い切り。

ところで俺は特に格闘技を嗜んでるわけでもないし喧嘩慣れしているわけでもなく、踊りが得意なわけでも陸上競技に秀でているわけでもない。そもそも昔から運動神経というものを信じられないくらい持ち合わせていないし、それを発揮するような機会をひたすら避けて生きてきた。出来る運動といえば近所を徘徊することくらいなもので、つまり、何が言いたいのかといえば、俺は転んだ。

実にきれいに。すってんころりん、という擬音がこれほどふさわしい転び方もそうないだろう。サンダル履きであったことと草に足を取られたことが災いしたようだったが、そんなことはどうでもよかった。俺はアスファルトに思い切り尻をつき、雑草の中に倒れた。ちょうどその時、傍らを一組の親子が通り過ぎた。母親は目を合わさぬよう揺るぎない視線を前方に向け続け、子供は通り過ぎながら、首が一回りするのではないか、というほど俺を注視し続けていた。それは、曇りなき眼、と表現してしまうにはあまりに不審の念で濁ってしまっていた。彼女の目に映ったであろう自分の姿を思い浮かべる。髭も剃らず、髪の毛も整えず、顔も洗わず、くたびれて生地も薄くなったタンクトップを着て、飯も食えずに平日の昼間から雑草の上に尻餅をつく男。寝起

きであるし、表情筋も緩みきっているだろう。時折、起床時に油断して鏡など覗くとカビの生えた饅頭みたいな男がそこにおり、自分でも非常に驚く。それはあまりに薄汚く、みっともない姿だ。結局一瞥もくれなかった母親の気持ちはよく分かる。俺だって、そんなもの見たくない。だから俺は、草をひっこ抜くことにした。全部、草が悪い気がした。

草を握り、引っ張る。掌の中に乾きと水気が同居したような妙な感覚が残る。しかし、茎も根も強く深く成長しているようで、軽く引っ張る程度ではびくともしない。強く引っ張るもか細い枝葉の部分がぶちぶちと千切れるくらいで、大元の茎や根は抜けやしない。俺は自分の筋肉が収縮するのを感じながら、植物というものの力強さに改めて感嘆した。ああなんてすばらしき生命のすばらしさか。

ところで俺は、じいちゃんの言葉を思い出す。数年前、しばらく行ってなかったので死んでしまう前に顔でも見せに行くか、と幾らかの小遣いも期待しながら、正月に遊びに行ったのだ。その時、庭の整備をやらされた。じいちゃんは死ぬどころかぴんぴんしており、老人ならではの時間に起床し、趣味の畑仕事に精を出していた。俺は田舎に行ってまで労働する気などさらさらなかったのだが、昼過ぎによたよたと起床した折に昼飯をかつ食らうじいちゃんに捕まり、ばあちゃんにも背中を押されつつ庭労働へと相成ったわけだった。主な仕事は雑草抜きだったが、これがまた抜けなかった。腰をいれる、とかあれこれ色々言われるもののあまりに効率が上がらないので、見かねたじいちゃんは一旦屋内に戻り、そしてバケツを携えて戻ってきた。

「水を、かけんだ」

かけるのか。そうか、とぼんやりしているとじいちゃんは突然俺の足元にバケツの中身をぶちまけた。思わずあげた悲鳴がよく晴れた空に消えて、土が吸い込みきれない水が溜まって池を作った。当たり前だが俺の足もズボンも濡れた。些か不愉快ではあったが、抗議は出来なかった。びっくりしたから。

つまり、水をかければ宜しい。あの後、水を吸って柔らかくなった土からは、忌々しい雑草が嘘のように抜けたのだ。俺は一旦家の中に戻り、そしていつからか部屋の隅に落ちていた空のペットボトルを拾い上げ、そこに水を注ぎ込んだ。小さい注ぎ口から溢れた水がシンクに落ちて音が鳴った。

さっそく表に出て水をかける。葉に跳ねながら、陽の光を吸い込んで落ちる。アスファルトの僅かな隙間に水が流れ込んでゆくのが見える。根元のほうで何か動くのが見えた。よく見るとありんこだった。ありんこたちがうじゃうじゃ水に溺れてもがいていた。少しだけ申し訳ない気持ちになりながらも、俺は水を注ぎ続けた。ありんこたちは次々と根元から這い出してきて、そして次々と溺れた。

草は、嘘のよう、とまではいかなくとも、割と軽く抜けた。幹から離れ拡散した枝をねじるようにしてまとめて抜くのがコツだ、と理解する。俺はそれを繰り返して、抜いた。抜き続けた。土の部分が少ないので、じいちゃんの庭のときのようにはいかないが、抜けた。時折、茎の途中で千切れて、根が隙間に残ることもあったが、指先で懸命にほじくり返した。俺はほじくり返したのだ。指は草で擦り切れ、土で汚れた。雑草の茂みから捨てられたゴミが幾つも出てきて不愉快になったり、学校帰りの少年少女に興味深く見守られて子供の純真さを呪ったりした。

作業は二時間にも渡り、引っこ抜いた草を積み重ねた山は俺の胸にまで届き、それをゴミ袋に包むのに更に難儀することになった。硬い茎はゴミ袋を突き破り、幾らへし折ってもへし折っても、突き出たのだ。そんなに俺のことが嫌いなのか、とまた苛立ちそうになったが、よく考えたらこれだけ引っこ抜いてへし折った草が俺を好きになるはずはなかった。俺は諦めて、ゴミ袋をそのまま放置した。家に戻り、玄関のドアを閉めると指先が痛んだ。特に目立った外傷もなく出血

しているわけでもなかったが、ひりひりとした痛みは止むことはなかった。しかし今俺にとって大事なものは痛みではなく、空腹と喉の渇きだ。俺はコンビニエンスストアに行き、うどんと卵とおにぎりと酒を買って、飲んで、食べた。がんもどきの入った新発売おにぎりがあったので買ってみたが非常に不味く、強い憤りを覚えた。

痛みが、治まらなかった。どころか酒を飲むと段々増してきた気さえする。指先の血管が膨らんで脈打つのを感ずる。草を抜いた際に細かい傷がついたのだろう。大した痛みではなかったが、落ち着かなかった。とは言ってもただ困惑していても仕方ない。俺は押入れから薬箱を取り出し、軟膏を塗りたくった。ものすごく古いのでかえって体に悪い気もしたが、仕方ない。他に薬はないし、新しいのを買う余裕はなかった。

いつまでも気にしていても仕方ないので、仕事にかかることにした。特に緊急の依頼があったわけでも創作への意欲が溢れてきたわけでもないが、落ち着かなかった。しかし、草抜きをやり遂げた充実感はおれから文学を奪う。もう今日は一仕事したじゃないか、という声がどこからか届き、うんそうだね、と俺は思う。だから、俺は眠る。安らかな眠りにつく。

夢を見る。

俺は蝶を見ている。それとも蛾を見ている。見分け方は、知っている。俺に止まったときに翅を広げているか、いないか、だ。でも、どちらがどうなのかは判らない。止まらないから。目の前を浮くそいつの銀色の翅に桃色の斑紋が乗っている。俺は風に揺れながらそいつを眺めている。桃色の斑紋も揺らいでいるように見える。そいつは揺れる俺を避けるようにして浮く。だから、俺はそいつに触れられない。止まらない。俺は揺れている。風が吹くから。

目覚める。覚ます。

布団にはいない。俺は、酒を飲みながら居間で眠ってしまっていた。こんなところで寝ていると風邪引くよ、と井上くんならばやくだらう。それとも、もっとまじめに仕事に励め、と叱るだらうか。でも、井上くんはいない。今日は帰ってこない。

俺はおしっこに行くことにした。摂取した水分が排出されたがっていた。そんなに俺の内側は不快なのだらうか、とニヤつきながらトイレに入り、便座を上げる。そして難なく排出を終えたところで、俺は指先で支える陰茎に違和感を覚えた。触感だった。陰茎に触れるその指先の触感、指先で触れる陰茎の触感、その両方がいつものそれとは違うような気がした。俺は寝起きでまだぼやける眼球で、よく見てみた。指先に毛のような何かがこびりついているようだ。いや。違う。指先から何かが生えていた。陰茎を離し、指先を顔に近づけてみる。生えているのは、草だった。まだ小さい、頼りない草の芽が俺の両の指先から何本も生えていた。俺はそのうちの一本を千切って、トイレに投げ込んでみた。芽を千切ると、指先に痛みが走った。だから俺はトイレを出てから昼食時に買って来た酒のプルタブを起こし、一気に飲み干した。指先の血管がどくどくと脈打つのを強く感じ、草の根がか細い血管に絡み付いているのを想像した。

一応、井上くんにも連絡をした。

「なんか、指から芽が生えたんだ」

「なら、水をたくさん飲みなさいな」

「水？」

「だって植物なら水でしょう。あげなくちゃ」

「酒なら飲んだよ」

「酒でもいいんじゃない？だって、おいしいでしょう？」

「うん。おいしい」

「お酒、おいしいもんねえ」

「うん。おいしい」

酒は、おいしかった。それに指先から草が生えたからといって特に不自由はないように思えたので、その日はそのまま何枚か書いてから、寝た。不自由はないどころか生えた芽がクッション代わりになって、キーボードをたたく衝撃から指先の皮膚を守っているような気さえした。これはもしかしたら文学の神様から俺への贈り物かも知れない、とも思った。貧乏にも負けずに文学に打ち込む俺の指先を守るための贈り物だ。

でも違った。そもそも俺は誰かから贈り物をいただけるほどには文学に打ち込んでいなかったし、指先から生えた草はやがて俺を蝕んだ。蝕んだ、という表現は違うかもしれない。草はすくすくと育っていった。それ自体はめでたいことだ。ある繁栄。喜ばしいことだ。しかしその代わりに俺は痩せ細った。搾り取られるように、細っていった。俺が己の体型に悩む乙女であるならまだしも、多少腹は膨らんではいるが悲しいことに俺は日々お腹を空かせている一青年なのであった。青年、というところで井上くんは嘲笑うだろうか。でも嘲笑われてもいい。青年、だ。俺は乙女ではなく。日々お腹を空かせている一青年なのであった。

だから、俺は、やせ細り、困った。

指先の草は俺の養分を喰らいながら、本当にすくすくと育った。それは俺の指を覆い、手を覆った。頬はこけ、腹もへこんだが、指を含む手はやけに膨らんだ。根が張ったのだと思った。俺は皮膚の裏側で血管や筋繊維に絡みつく根を想う。か細い根は毛細血管と区別がつかないだろう。もうそれは、俺の一部になっているのかもしれないし、そもそもはじめから俺の一部なのかもしれない。

数日後、蕾がついた。俺は井上くん連れられて医者に行く。医者は驚いたような、特に何も思っていないような顔をして、うーんわからないねえ、と言った。こんなの見たことも聞いたこともないよ。俺は医者のかくちくちした口調に少し苛立った。そして、とりあえず、と言われ、点滴を打たれた。老婆がたくさん座っている部屋に通され、腕に管を通された。根のせいで血管が見つげにくいのか、蜂みたいな顔をした看護師は随分やりにくそうにしていた。動かないでくださいね、と言われたとおりにしていると、自分のはじめから植物であったような気さえしてきた。何もせずに動かないでいることが自分にとってこんなにも自然なことだとは思わなかった。点滴は、たいして効果がないように思えた。そもそもいくら俺に栄養を注入したところで指先のこいつが吸い取ってしまうのだから意味がない。検査が検査が、とのたまう医者にそう告げたが、植物は専門外なんだよお、としか言わなかった。俺たちは静かに病院を後にした。

「もうさ」と、井上くんは言った。

「無理やり引っこ抜いちゃえばいいんじゃないの？」

「痛いんだよ、これ」

「んなこといったって、このままじゃ死んじゃうんじゃない？」

「やなこと言うなよ」

「そんなにやせ細っちゃってさあ」

「.....俺が死んだらこいつらはどうなるんだろう」

「.....そのうち枯れる？」

「自分が枯れて死んじゃうかもしれないのに、なんでこいつらは俺を搾り取るんだ！まったく意味がわからない！」

「うるさいなあ。意味なんて大抵わからないじゃんよう。」

それから、花が咲いた。

ある日、目覚めたら咲いていた。仰向けに眠る俺の視界の隅に見慣れぬ色があったのだ。銀色の花びらの中に桃色のめしべが見えた。ガラス越しの朝日が透過して、白く光っていた。俺は、そして、それを、千切った。痛かった。でも、もう一度、千切った。千切って、そして口に入れる。花びらだ。銀色。俺はそれを噛む。味がする。桃色。誰かの想いのように甘い味。誰かの想いのように苦い味。俺は、俺から生えた花を食う。朝起きて。噛み締める。俺の歯の間で銀色の花びらがすり潰れる音が聞こえる。俺の歯がこすれて、細かい振動が骨を伝う。たぶん、脳天にまで伝う。俺は下半身に血液が集まっているのを感じている。朝だ。俺は起きている。俺はむしゃむしゃと花びらを食べ続ける。痛みは指先にあるのか茎の先にあるのか口の中にあるのかわからなくなる。

なっている。

一通り食べ終わると、俺は階下に降り、浴槽に湯をためる。少しぬるくらいがいい。俺は俺の

体をすっかり水浸しにしてぐずぐずにしなくてはいけないから。息を吐くと、青臭い匂いが鼻腔に触れる。銀色の花びらがすり潰れたのだ。俺の歯も銀色になるだろうか。すり潰したから、色が、移って、伝わるだろうか。

それから、服を脱いで、湯につかった。浸った。水浸しになった。

それから、つかり続けた。何分も。何時間も。浸り続けた。俺の皮膚は湯を吸って伸びた。指先の皮膚は皺になった。爪は伸びないからだ。だから伸びた皮膚が余って皺になる。俺の皮膚は伸びて、段々ぐずぐずになって、俺は伸びて、広がっている。もっと伸びればいいと思う。

太陽が太陽みたいに風呂場の窓ガラスを赤く照らしている。それはカビの生えた洗い場のタイルを撫でて、その先にある俺の鼻先も撫でる。皺だ。俺はそして指先から生える植物をその皺だらけの指先で掴む。反対側の手。ねじるようにしてまとめて掴む。コツだ。俺は、学んでいる。千切らなければ痛くないんじゃないか。そう考える。俺は俺から生えた草を引っっこ抜こうとしている。喉が渴いている。頭のでっぺんから汗が垂れて、まぶたに触れる。喉が濡れればいいのに、と思う。でも自分がつかる湯を飲もうとは考えない。欲望しない。少し力を込めながら指先をよく見てみる。草が生えるその穴が、広がっているのが見える。茎と皮膚の隙間に、黒い空間が見える。俺の皮膚に黒い穴があいている。それは、いくつも、あいている。あいている隙間にはお湯がたまっている。俺の動きに合わせてその表面は揺れる。

揺れる。

揺れる。

俺は揺れる。

そして引く。

俺の腕の中には骨があって脂肪があって筋肉があって血管があって神経があって、植物の根はそのすべてに絡み付いているのだと思う。細い根が。赤い根。それが、引っ張られている。俺が掴んで、引くと、腕の奥に絡む根が動くのを感じる。伸びて広がったから、絡みつきが弱くなって、だから根もずると抜ける。俺は俺の腕の中で何かが欠けていくのを感じている。俺の腕の中から何かが抜け落ちて、隙間が出来ているのを感じている。

空白が。黒い穴が。

腹の底に落ちた花びらが震える気がする。もう、溶けているだろうか。俺の腕にできた隙間は少しずつ大きくなっていく。スカスカになる。隙間の内壁が、通り過ぎてゆく根を感じる。どこか千切れた箇所もあるのだろう。少し痛みも感じる。さよなら。俺は思う。短い間だったけど。特に思うこともないけど。さよなら。俺はそう言う。のどが震える。俺は浴槽に浸かっている。風呂場の空気が震える。湯気が漂う。

そしてやせ細った俺は両腕から草を引き抜いた。体液で赤く染まった根が湯船に垂れる。根を中心にして、湯に赤い染みが広がる。俺はそれを眺めた。何も思わずに眺めた。思えなかった。俺の体力は限界に達しようとしていた。腕にあいた穴から抜け出るように、俺の意識は掻き消えようとしていた。俺は浴槽に沈む自分の姿を思い浮かべた。伸び広がった俺は浴槽の壁面に張り付き、湯はすっかり赤くなるのだろう。それはきっと隙間から差し込む陽の光に照らされて、きれいに煌くのだろう。きれいなものは好きだ。でも、だめだ。沈むのはよくない。そんなことになったら、井上くんはきっと怒るだろうから。怒った井上くんはすごく怖いし、めんどくさいから。だから俺は、草を放り、浴槽から這い出る。赤い体液がカビだらけのタイルに落ちる。ぽた、と音がする気がする。黒いカビの上に赤い体液が広がる。光が差す。赤い体液が滑らかに光っているのが見えて、でもそこから先は、覚えていない。

俺の意識はその時、腕の穴から、すっかり抜け出てしまった。

それから俺はどうしたのだろう。次に気づくとベッドの上にいる。最初に白い天井が見えて、それから井上くんの顔が見えた。井上くんはとても怒った顔をしていた。何故一人でこんなことをしたのか、と大きな声で言った。結局、怒られた。俺は固いシーツが肌を擦るのを心地よく思いながら、それを聞き流した。腕の穴を眺めると、黒い穴が無数にあいていた。俺はその穴たちが蠢くのを感じた。俺の脈拍に合わせて蠢いているように感じた。それは俺の一部であるはずなのに、違う生き物のように思えた。

穴、が？

俺は少しおかしな気持ちになった。穴はそこに何も無いから穴であるはずなのに、俺はそれを自分の一部であるかのように感じた。正確に言えば、何も無い空白と俺の間にある皮膚にそれを感じたのだろう。しかし正確に言うことがそれほど大事なことだとは、俺は思わない。井上くんは俺の笑みに気づき、更に声を荒げていた。

それからしばらくして、病院を出た。検査だなんだとうるさかったが、金もなかったし、そのころには白い部屋にも飽きていた。

穴はそれからしばらく残っていたが、そのうち埋まった。何もなかったはずの空間が自分の肉で埋まっているのは少し奇妙なことである気もしたが、同じくらい、奇妙なことではない気もした。そうして、俺の指先から植物が生えていた痕跡は、消えていった。伸びて広がった体も元に戻

ったし、痛みもそのうち消えた。俺は一杯ご飯を食べ、酒を飲み、失った体力を取り戻していった。すっかり元に戻ったように見えた。

でも、俺は感じている。千切れて引っこ抜き損ねた根が腕の中に残っているのを。

蠢く、から。

感じる。

それはこうしてキーボードを叩く間も、俺の腕の奥底で。神経に、筋肉に、血管に、絡みつきながら、脈拍に寄り添うようにして。俺は草どもの痕跡を腕の中に感じている。そいつはまた成長するだろうか。俺の腕の上で繁殖するだろうか。

すればいい、と俺は思う。

存分に生きればいい。そうしたらまた、引っこ抜いてやるから。

だから、好き勝手生きればいい、と思う。